

## コリントの信徒への手紙一 14章26節～40節

兄弟たち、それではどうすればよいだろうか。あなたがたは集まったとき、それぞれ詩編の歌をうたい、教え、啓示を語り、異言を語り、それを解釈するのですが、すべてはあなたがたを造り上げるためにすべきです。異言を語る者がいれば、二人かせいぜい三人が順番に語り、一人に解釈させなさい。解釈する者がいなければ、教会では黙っていて、自分自身と神に対して語りなさい。預言する者の場合は、二人か三人が語り、他の者たちはそれを検討しなさい。座っている他の人に啓示が与えられたら、先に語りだしていた者は黙りなさい。皆が共に学び、皆が共に励まされるように、一人一人が皆、預言できるようにしなさい。預言者に働きかける霊は、預言者の意に服するはずです。神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです。

聖なる者たちのすべての教会でそうであるように、婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語る事が許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい。何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい。婦人にとって教会の中で発言するのは、恥すべきことです。それとも、神の言葉はあなたがたから出て来たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ来たのでしょうか。

自分は預言する者であるとか、霊の人であると思っている者がいれば、わたしがここに書いてきたことは主の命令であると認めなさい。それを認めない者は、その人もまた認められないでしょう。わたしの兄弟たち、こういうわけですから、預言することを熱心に求めなさい。そして、異言を語ることを禁じてはなりません。しかし、すべてを適切に、秩序正しく行いなさい。

横須賀長沢キリスト教会

2020年6月7日 第二主日礼拝説教要約

コリントの信徒への手紙一 14章26節～40節

「神の秩序」

説教者 大須賀真人牧師

今日の聖書箇所では、39節でこのように言われています。「わたしの兄弟たち、こういうわけですから、預言することを熱心に求めなさい。」このところをしっかりと覚えて聞いてまいりましょう。

26節には、コリント教会の集まったときの様子が記されています。「あなたがたは集まったとき、それぞれ詩編の歌をうたい、教え、啓示を語り、異言を語り、それを解釈する」とあります。このことは、必ずしも私たちが現在行っている礼拝のときだけでなく、ただ「集まったとき」にいつでもこのように行っていたということです。

27節、28節では「異言」について言われています。順番に語り、一人が解釈するということです。しかし、「解釈する者がいなければ、教会では黙っていて、自分自身と神に対して語りなさい」とあります。つまり、すべての人たちが主の御言葉に聞く機会を持つことを優先することが勧められています。そして、29節～32節では「預言」について言われていますが、ここでも、誰か一人が「預言」をしていけばいいということではなく、すべての人たちが「預言」することが言われています。よく「預言」の賜物を、「牧師」や「説教者」の専売特許のように思われるかたがおられます。もちろん、「牧師」も御言葉を語りますし、「説教者」も「預言」の賜物に助けられて自分の役割に与っています。しかし、この「預言」の賜物は、それらの役割を助けることに留まりません。すべての人たちが持つべきものとして、強く勧められているものです。つまり、教会でどのような場で、どのような立場で、どのようなことを語るにも、どのような奉仕をささげるにも、この「預言」の賜物は必要不可欠なもので、これによって私たち教会が造り上げられていくと言われています。さらに、29節では「預言する者の場合は、二人か三人が語り、他の者たちはそれを検討しなさい」と言われています。聞き手のほうは、ただ単に語られたことをそのまま受けるのではなく、語られた内容を「検討する」ことが求められています。その語られた「預言」が、主なる神さまのどのような啓示なのか、死と復活の主、十字架のイエス・キリストによる福音についてどのようにあらわされたものなのか、ということをしっかり吟味するように言われています。すべての人たちが「預言」できるようになるということは、すべての人たちが聖書の言葉から主なる神さまの御言葉に聞き、すべての人たちがそれを自分に預けられた御言葉としてしっかり受け、分かち合い、さらに吟味し合うことができるようになるということです。「預言」の賜物は、誰か特定の人たちの専売特許ではありません。「集まったとき」に必ず、すべての人たちによってなされるものです。そして、その「預言」の賜物が私たち教会を造り上げていくのです。

さて、33節後半～36では、女性の振る舞いについて言われています。この箇所は、慎重に聞いていく必要があります。まず、33節後半から34節ではこのようにあります。「聖なる者たちのすべての教会でそうであるように、婦人たちは、教会では黙っていなさい。」これを聞いて、ギョツとする人は多くおられることでしょう。誤解のないように確認しますが、パウロは女性が教会で語ることを決して禁じてはいません。11章5節にはこのようにあります。「女はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶらないなら、その頭を侮辱することになります。それは、髪の毛をそり落としたのと同じだからです。」当時のコリント教会でも、女性は「異言」も語れば、「預言」も語っていたのです。そのことは、かぶりものの条件はあるものの、パウロも認めているところです。また、ローマの信徒への手紙16章では、多くの学者たちのあいだで女性の使徒と認められている「ユニアス」に向けても、パウロは丁寧に挨拶を記しています。さらに、あの有名なアキラとプリスカについては、プリスカが多くの人たちに教えを語っていたことは疑う余地のないことでしょう。パウロは、女性が教会で語ることを決して禁じてはいないのです。では、ここでパウロは何を伝えようとしているのでしょうか。それは、「預言」以外のことに、あまり心を奪われないように！」ということです。教会ではむしろ女性も婦人も自由なのだから、「預言」や「異言」こそ大胆に行うように、そのなかでも「預言」を遠慮なく行うように、強く勧めているのです。

最後にパウロは言っています。「自分は預言する者であるとか、霊の人であると思っている者がいれば、わたしがここに書いてきたことは主の命令であると認めなさい。それを認めない者は、その人もまた認められないでしょう。」これはたいへん強い意図を持った発言です。その内容の中心は「預言することを熱心に求めなさい」ということです。

主なる神さまが教会に立てる秩序とは、まず何よりも、「預言することを熱心に求める」ところから始まります。そして、すべての事柄に「主なる神さまの御言葉」が伴って、私たち教会が造り上げられていくのです。それも主なる神さまが私たちを用いて私たち教会を造り上げてくださる。そして、教会は主の愛と平和で満ち溢れるのです。

今週も、死と復活の主、十字架のイエス・キリストは私たちと共におられます。主の恵みと祝福に与ってまいりましょう。祈りましょう。

#### 【祈禱】

主よ私たち教会を憐んでください。私たち教会を祝福してください。この一週間も主の恵みと祝福が豊かに増し加えられますように。死と復活の主、十字架のイエス・キリストの御名によってお祈り致します。アーメン